

2013 年 (平成 25 年)  
11 月号 (No. 822)

公益社団法人  
**日本山岳会**  
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

会員の会報購読料は年会費に  
含まれています

URL ● <http://www.jac.or.jp>  
e-mail ● [jac-room@jac.or.jp](mailto:jac-room@jac.or.jp)

## 雪山シーズンを前に、雪崩について

話し手 日本雪崩ネットワーク理事長 出川あずささん

2000年に活動を開始し、雪崩教育、雪崩情報、そして事故調査など、幅広い雪崩安全対策活動を実施している日本雪崩ネットワーク(\*1)。今年の雪山シーズンが始まる前に、理事長の出川あずささんに話を聞いた。

### 雪崩事故の実態

—日本の雪崩事故の実態はどのようなものなのでしょうか？

出川あずささん(以下、敬称略)日本では、1990/91年のシーズンから2012/13年のシーズンまでの間で、124件の雪崩死亡事故が起こり、201人が亡くなっています。平均しますと年間に5件の死亡事故が起こり、9人の方が亡くなったことになりました。

全体の8割が登山や山スキー、スキー場などレクリエーションの

### カテゴリーです。残り2割が除雪や建設現場など業務中の事故、あるいは住民などの被災になります。そして、レクリエーションのカテゴリーの死者の半数が登山者です。これは日本の特徴と言えます。ヨーロッパであれば死者の8割がスキーヤーになります。

—報道される印象では、スノーボードの事故が目立つように感じています。スノーボードの事故が目立つように感じ

てしまうのですか？

出川 山岳における雪崩死者の1割弱がスノーボードです。90年

代半ばにスノーボードのブームが起きていますので、時間軸から考えても多いとは言えません。スノーボードの雪崩事故が多く感じるのには、おそらくメディア・バイアスによるものではないでしょうか。

### 目次

雪山シーズンを前に、雪崩について	1
公益法人活動の新たな段階へ	4
スイス山岳会創立150周年記念サミット	6
【山岳】掲載(河口慧海を支えた財界人とその時代)の、その後	7
テンジン・ノルゲイの息子、ジャムリン来日	8
「旅先で出会った古書」後日談	9
活動報告	10
集委員会/アルパインフォトビデオクラブ	
図書受入報告	11
支部だより	12
北海道支部/福岡支部	
図書紹介	14
会務報告	16
新入会員	17
ルーム日誌	17
会員異動	17
Climbing&Medicine	59
INFORMATION	18
日本山岳会所蔵資料紹介 No.7	19

▶日本山岳会事務(含図書室)取扱時間  
月・火・木……………10~20時  
水・金……………13~20時  
第2、第4土曜日……………閉室  
第1、第3、第5土曜日……………10~18時

—最近滑走系(スキーヤー、スノーボード)の事故が増えているのではないのでしょうか？

出川 軽微なものを含む事故発生件数と、死亡事故のデータは、分けて考える必要があります。前者は正確な数を掴むことが難しく、年ごとの増減を語る際にはとても慎重な態度が必要です。

死亡事故は、経年による明快な特徴はありません。もともと年平均の数字が小さいですし、年ごとで様子が異なります。10人を超える人数が死亡した年もあれば、5

人以下だった年もあります。

—登山者の死亡者が多いということですが、これには何か特徴はあるのでしょうか？

出川 登山者の死亡者の8割が山岳会あるいは大学山岳部やワンダーフォーゲル部、もしくははそのOB組織などに所属している組織登山者に区分されます。また、スキーヤーに区分されている死亡者の4割弱がやはり組織の枠に入る方々です。

さらに、最近6年のデータを見ますと、登山者の死亡者の7割がアバランチ・ピーコンを装着していません。

—ピーコンを装着していない割合が多いことに、驚きました。

出川 1993年に日本製のピーコンが発売され、90年代後半には

何種類ものビーコンが輸入され、国内でも簡単に購入できるようになりました。また、レクリエーションの雪崩団体が90年代からビーコン携帯の啓発活動を熱心にされてきた歴史などを振り返りますと、登山者の携帯率の低さは、とても悲しいものがあります。

「クライミングを行なう際(冬期登攀)には、ビーコンが邪魔に感じる」という感想を漏らす方もいます。

出川 たとえば、アイスクライミングを行なう際、オーバーヘッド・ハザード(自分の上方の危険要素)がなければ、ビーコンを外し、アイスクライミングのムーブに集中するというのはありでしょう。しかし、アイスクライミングを行なう現場までのアプローチで雪崩地形を通過するのであれば、途中ではビーコンを着けていてほしいと思います。たとえば、登攀対象となる氷雪壁が現れるまでの間に、谷を詰めることになる場合などです。なぜ、組織登山者の死者が多いのでしょうか？

出川 現在、ひとつずつ事故の実態を整理している段階ですので、はつきりした理由はまだよくわかりません。ひとつ言えることは、複

数の人が一度に亡くなる大きな事故が多い傾向にあります。一般的に被害の大きな事故は、雪崩地形とグループマネージメントの関係に問題を残す場合が多いものです。もし、この会報読者のなかに死亡事故の関係者がいらっしゃるのであれば、今後のデータ整理にご助力をいただければ幸いです。

雪崩を学ぶには

「これまでの雪崩教育の経験を通して、登山者が雪崩について学ぶ際、気になっている点はあるでしょうか？」

出川 ふたつあります。

ひとつは、自分の感覚的な判断に頼るのではなく、不安定性を示す直接的な兆候を重視してほしいと感じます。たとえば、真新しい雪崩やシューティングクラックなど、「直接証拠」と呼ばれるものを重視してほしいということです。

ふたつ目は、地形とグループマネージメントです。雪崩というとどうしても雪の話になりがちです。雪の結晶や積雪安定性のことなどです。しかし、地形理解のほうがより重要です。そして、グループマネージメントは被害を小さくす



セイフティキャンプ(\*4)で、雪崩の地形について学ぶ

るための鍵と言えます。

「自分の感覚に頼らないとは、どういうことでしょうか？」

出川 たとえば「雪を五感で感じて危険を察知しよう」といった表現を見ることがあります。とても抽象的な表現ですね。雪崩の危険回避に必要なのは、むしろ「自分の感覚に距離を置く」ことです。感覚や直感はこのように訴えているけど、本当だろうか？ その根拠は一体、なんだろうか？ とちよつと立ち止まって考えることです。なぜ感覚に距離を置く必要があるのでしょうか？

出川 感覚は、その人の体験に根差しますので、必ず認知バイアスの影響を受けます。それゆえ、し

ばしば当てにならないのです。さらに雪山は外部刺激の強い環境ですから、そこでの体験は強い重み付け(バイアス)がされることとなります。そのため、体験したことを適切に理解する知識や方法を知らないと、容易に誤った解釈をしてしまうものなのです。

雪崩は物理現象です。判断に必要な情報を手にできれば、現場主義的なりスク管理は可能です。これについて『雪崩ハンドブック』(\*2)の著者であるデビッド・マックラングが、「雪崩の原因は良く知られており、人間の感覚に達し、意志決定を可能にする情報を分離し、説明し、そして使用することが可能である」と指摘しています。そして「雪崩予測において、人間が認知すべき基本的な要素は既知であり、対処しうるものである」とも言っています。すごい体験(このすごいも抽象的ですが)をした人だけが、何か特殊な危険察知能力を身につけることができると考えるのは、よくある誤解です。

「しかし、感覚的な判断というものもあるように思うのですが？」

出川 そのとおりです。適切な教育を受け、継続的な訓練を積んだ

プロフェッショナルにおいては、直感領域での判断も当然あります。しかし、それはあくまで雪崩に関わる原則的な事項など、極めて重要な土台となるべきものの上に存在しているのです。

つまり、基礎的なことの理解が大切であり、前提になるといってどうでしょうか？

**出川** そうです。「雪崩事故は、日付と場所の名前が変わるだけだ」という表現が雪崩プロフェッショナルの間にはあります。ほとんどすべての雪崩事故は、既知である重要事項の組み合わせの中でしか起きていないからです。これはもちろん、日本国内に限ったことではなく、海外の山にも日本の山にも通ずることです。

では、山に登りつつ、安全に雪崩対策のスキルを身につけるにはどうしたらいいのでしょうか？

**出川** 地形を学び、地形を上手に利用した行動を繰り返す経験をたくさん積むことです。そして、その過程を通して、ゆっくりと積雪の不安定性について学んでいくのがいいでしょう。

ただし、シーズンに数回冬山に行く程度では、不安定性を的確に

把握できるようになるのはなかなか難しいものです。

―それでは、十分な数の山行ができず、不安定性評価のスキルを上げるのができない人は、どうしたらいいのでしょうか？

**出川** 経験ある人と一緒に行動したり、あるいはガイドを利用するのが良いと思います。また、雪崩情報があれば、その日の全体傾向が理解できますので、行動計画の助けになるでしょう。現在、日本雪崩ネットワークでは、白馬連峰を対象に雪崩情報(\*3)を出しています。これは今後、他の山域にも広げていきたいと考えています。

### 雪崩情報の意味

―日本雪崩ネットワークの雪崩情報はどのようなものですか？

**出川** ヨーロッパや北米で公に報じられているものと基本的に同じです。標準化された5段階の危険度区分を使用し、存在する雪崩の危険の内容を伝えることで、山岳地域で行動する人をサポートする情報として発表しています。欧米と同基準で行なうため、カナダの専門機関と提携し、準備をしてきました。

―団体の活動開始から雪崩情報まで10年という、決して短くない時間がかかっていますが、なぜでしょうか？

**出川** 人材が育つには時間が必要だからです。雪崩情報を発表するには、まず、山岳地帯における各種データが必要です。多数の人が協力して情報を共有しなくては、山岳地帯の積雪の状態はわかりません。情報を共有するには、雪崩や積雪などを観察して記録するためガイドラインが必要です。さらに、ガイドラインに沿ってデータを採り、評価を行なう講習や訓練が必要です。これらは単に一回の講習を受けたからといってできるようになるのではなく、さらに現場での継続的な経験を積む必要があります。こうしたことを、ひとつずつ順々に実施してきたが故に10年という時間がかかりました。

―個人の安全対策から、情報を共有することでの可能となる「協働する安全対策」へと、日本の雪崩対策を転換したのが日本雪崩ネットワークだと思うのですが、今後の活動の方向性についてお聞かせください。

**出川** 日本雪崩ネットワークが取

り組んでいるのは「雪崩コミュニティを成熟させることで、公衆の雪崩安全対策の向上を目指す」とです。規則や禁止といった対処策による事故防止活動では根本的な解決になりません。私たちの活動は、継続的かつ地道な作業が必要であり、その成果が見えてくるまでには、時間がかかります。雪崩情報などは、人的リソースを使った社会インフラの整備とも呼べる作業です。活動の趣旨や方向をご理解いただき、多様な形でのサポートをいただければ幸いです。

\*1 特別非営利活動法人日本雪崩ネットワーク (<http://nadare.jp/>)

\*2 『雪崩ハンドブック』(デビッド・マックラング、ピーター・シアラー著、日本雪崩ネットワーク訳、東京新聞出版局刊)ほか日本雪崩ネットワークは、『雪崩リスクマネジメント』(ブルース・トレンパー著、日本雪崩ネットワーク訳、山と溪谷社)、「山岳ユーザーのための雪崩リスク軽減の手引き」(出川あずさ、池田慎一著、東京新聞出版局刊)の出版についても携わってきた。

\*3 雪崩情報は <https://nadare.jp/alert/index.html> でみる事ができる。

\*4 日本雪崩ネットワークが開催している2日間と5日間のキャンプ。雪崩への理解を深め、行動マネージメントによってリスクを軽減させるための座学と、フィールドでのトレーニングを行なう。

## Information

## 公益法人活動の新たな段階へ

## ―税額控除の承認を受けて―

公益法人運営委員長 佐野忠則

日本山岳会は、特定公益増進法人として税制上の優遇措置を受けて参りました。このたび、長期間の検討を経て厳しい条件をクリアし、個人が本会に寄付をした場合の税額控除制度の適用に係る証明を受けることができました。

この税額控除の対象法人は、平成25年9月末現在、684法人のみですが、これにより本会は寄付金に関して、公益法人に認められているすべての税制優遇措置の適用法人となることができました。今後、充実した山岳会活動には収入の確保が組織運営上の課題となるなかで、一般社団法人などでは得ることのできない、継続的な組織運営のための大きな足掛かりを得ることができました。

## 1. 公益法人に寄付をした

## 個人に対する税制優遇

日本山岳会は、新たに平成25年10月15日に「税額控除適用法人」として認可を取得致しました。税額

控除の適用とは、本会に寄付をしていただいた寄付者が、所得税の優遇措置を受けられる制度です。

## ◆所得税

所得税については、左ページ図のように2種類の優遇があります。このうち、②の「税額控除」が、今回新たに認められた制度です。寄付をされる場合は、①「所得控除」または②「税額控除」いずれか有利な方式を選択し、寄付金控除を受けることができます。多くの場合、②「税額控除」を選択された方が、税額が従来よりも少なくなり、なお税額控除を受けるためには、確定申告を行なうことが必要です。日本山岳会が発行する「領収書」を添付して、税務署に申告してください。また併せて、「税額控除に係る証明書」の添付も必要となります。これは内閣総理大臣の証明書であり、寄付をされた方にはその「写し」を、領収書と併せてお送りします。

確定申告の時期は毎年2月16日から3月15日までです。勤務先などで実施される年末調整では、寄付金控除を受けることはできませんのでご注意ください。

さて、以下の制度は従来から認められている優遇措置ですが、改めてご紹介いたします。

## ◆個人住民税

個人住民税について、都道府県または市区町村が条例により指定した寄付金（公益法人に対する寄付金等）は、以下の金額が個人住民税の額から控除されます（税額控除）。

ア 都道府県が条例指定：（寄付金額－2千円）×4%

イ 市区町村が条例指定：（寄付金額－2千円）×6%

⇒重複指定であれば、（寄付金額－2千円）×10%

所得税の確定申告の際に、個人住民税の寄付金控除も併せて申告できます。

都道府県民税については、現在は東京、埼玉、神奈川、岡山が対象です。市区町村については、ホームページに掲載予定です。

## ◆相続税

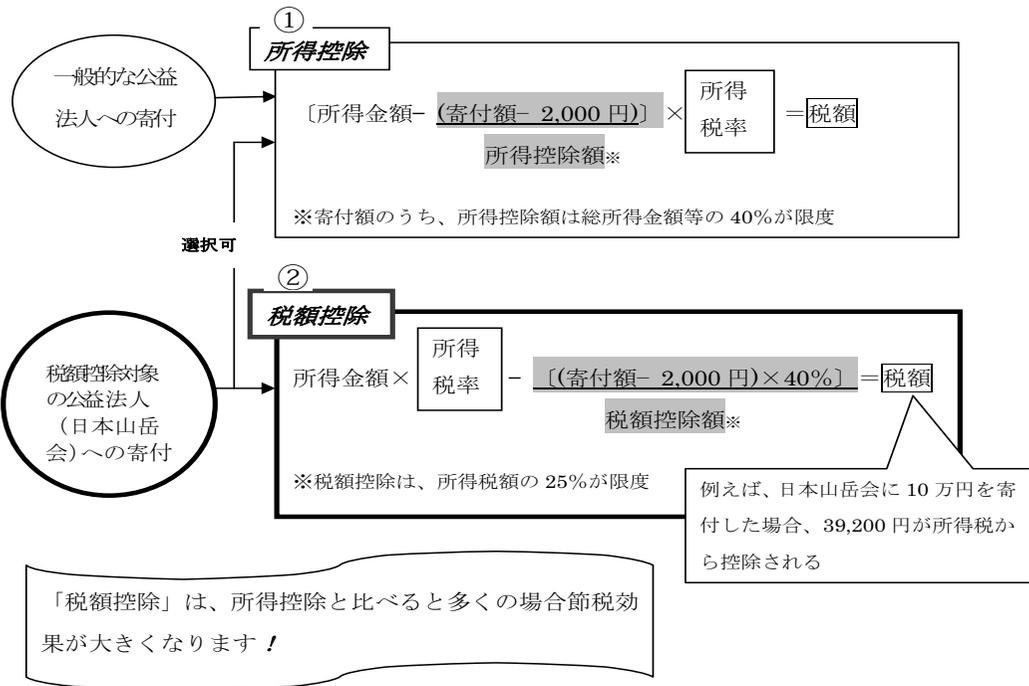
相続税について、個人が相続財産の一部またはすべてを公益法人に贈与した場合、非課税となります。この場合、有効な遺言書に本会を受取人として指定していた必要があるがあります。また、配偶者や子どもなどの「法定相続人」には、遺言書の内容にかかわらず一定の遺産が相続できる「遺留分」が定められていますので、遺産をどのようにに配分するか、慎重に検討していただき、遺産の配分や遺言の書き方などは、弁護士、信託銀行などにご相談されることをお勧めします。なお、金銭以外の財産を遺贈される場合は、本会の公益法人運営委員会にご相談下さい。

すでに本会は、この制度を利用して猿投の森（愛知県瀬戸市）隣接地1万5千平方メートルの寄贈を受け、東海支部が画期的な森づくり活動計画を進めています。

## ◆譲渡所得への非課税

みなし譲渡所得課税について、個人が財産を公益法人に贈与した場合、その贈与が教育または科学の振興、文化の向上、社会福祉への貢献その他公益の増進に著しく

所得税に関して、新たに認められた「税額控除」



寄与することなど、一定の要件を満たすものとして国税庁長官の承認を受けたときは、非課税です。

2. 公益法人に寄付をした法人に対する税制優遇

◆ 法人税

会社などが支出する寄付金は、全額を損金(経費)として処理することはできません。しかし、公益法人に対する寄付については、一般寄付金の損金算入限度額とは別に、別枠の損金算入限度額が設けられています。つまり本会に寄付をした場合には、会社などの経費として処理することが出来る範囲が広がるので、法人税が減免されることとなります。また、なによりも公益法人に対する寄付を経費で処理できることは、会社などにとつても、無税で社会貢献できるメリットがあります。

寄付税制の活用について

日本では、欧米のように寄付の文化が育たないと言われていますが、その理由のひとつとして、寄付をしても税制面で欧米のように優遇されないということが挙げられています。しかし、平成23年6月

の税制改正で冒頭の税額控除制度の導入などにより、少なくとも公益法人に関しては、寄付金の受け取りやすさは世界でも有数になってきたようです。本会では、寄付のお願いについてのパンフレットを作成中で、ホームページでもお知らせできるよう準備中です。また、寄付によって本会の活動が活性化した事例も逐次、報告します。以上のような寄付に関する税制について、ご理解をいただくとともに、日本山岳会の活動を支援する会員外の方への情報提供もお願い致します。

## Report

## スイス山岳会創立150周年記念サミット

## 登山の将来に向かって―山岳団体における挑戦―

公益社団法人日本山岳協会 常務理事総務部長・日本山岳会会員

小野寺 斉

10月4日、「スイス山岳会創立150周年記念サミット」が、スイスにて開催された。これに併せて「国際山岳連盟総会」も開催され、スイス山岳会では、その前日にサミットコンファレンスを開催し、活発な討議を行なった。

サミットコンファレンスのテーマは、「将来における登山および山岳団体における挑戦」である。登山における将来像として、フリーアクセス、気候変動、そして山岳環境における自然保護が密接に関連している。この問題に対し、我々は将来どのように実践的に対処できるか、登山家、科学者、組織の代表者が集まり討論を行なった。司会はドイツの山岳専門誌『ベルクシュタイガー』編集長のマイケル・ルランド氏、まとはめはスイス山岳会前会長のフランク・ミューラー氏である。

基調講演は、最初にアルプス保全委員会会長のドミニク・ジグリ

スト氏により「将来における山岳および山岳スポーツ、その現状と動向」と題して行なわれ、次にベルン大学教授ブルーノ・メッセリ氏が、気候変動等について主に科学的視点から発表した。

## 基調講演

温室効果ガスは、山に対するフリーアクセスにも影響を及ぼし、消滅した氷河もある。クレバスが変化し事故も多発している。氷河湖が各地にでき、洪水はインフラにも影響している。エベレストについては、最初の30年の登頂者数と今では大変な違いだ。BCにホテルがあるが、これはよくない。シエルパとの乱闘はヨーロッパでは大々的に報じられた。互いに敬意を払うべきだ。タリバンによる事件も発生、多くの登山家が亡くなった。山は変化している。映画などでも登山は夢を与え、山の良さをほめている。スポーツクライミ

ングが普及し、大会も盛んだ。

## パネル・ディスカッション

講演後に、スイス山岳会会長のフランソワ・ジャッキー女史、インドアイベックスのマンディップ・シンソイン創立者あるいは国際山岳連盟自然保護委員長のリンダ・マクミラン女史など数人のパネラーでセッションを分けて討論した。

第1セッション「気候変動と登山、山岳団体の責任」では、ドイツでは90%が車で山に行く、制限すべきか、バスなどの公共輸送、などが取り上げられた。別の解決方法としてソフトツーリズムという考え方がある。例えばインド、ネパール、チリなどであるが、これらの環境をポジティブに受け入れるのである。自分で歩き、馬を使い、自然そのままの環境を受け入れ、そして楽しむ。つまり可能な限りこれらの環境を残す、ということである。プロジェクトを作つて実践したらどうか。気候変動について選択の余地はない。従来の危険なルートの変更、禁止、新しいルートの開拓などリスクは受け入れ、より厳しくなるだろうが、こ



パネル・ディスカッションの模様

れらについての教育は山岳会の義務である、となった。

第2セッション「フリーアクセス、山岳団体の選択」では、自然環境保護とツーリズムは討論すべき重要なポイントであり、公共輸送については賛成であるが、新しい設備を作らなくてはいけないことから、リアクションについても考えるべき、との話があった。シエルパとの乱闘については、一方の当事者にスイスの登山家が含まれていることは皆知っているが、シエルパに敬意を払いましょう、と

いうことになった。ヒラリーステップの梯子については、ネパール関係者が梯子を固定しておくつもりらしい、公募登山についても複雑な問題であることはわかってはいるが、反対するなどの発言が続いた。

会場にいたアンツェリン氏は、発言を求めたが聞き入れてもらえなかった。この聞き入れてもらえなかったこと自体も含めてであるが、翌日の総会に時間をもらって苦渋の表情で意見を述べた。すなわち、乱闘については双方が過ちを認めているということ、ネパールは梯子の固定化は考えていない、ということ、公募登山についても先進国(山はスポーツの1つ)と低開発国(生活の糧)の考え方の違いを訴えていた。

以上、2回の基調講演の後、総合として第3セッションがあったが、重なる箇所もあり割愛する。

### フランク・ミュラー氏によるまとめ

人と自然を見ながら相手に対し敬意を抱き、責任を持つこと、気候変動に左右されない実践的登山を行なうこと(技術を磨くこと)、

山への影響を減らすように個人個人で責任を負う(車使用など)こと、山岳地域における成長と限界を見極めること、自分自身の「エベレスト」を発見し楽しむこと、人は手つかずの自然を必要としていることを理解し、自然を守るために行動すること、謙虚な気持ちで登山を楽しむこと、が挙げられた。

国際山岳連盟とその仲間たちはどのようにして以上のチャレンジに対して応えられるかが重要であるとして、最後に「スイス山岳会は公募登山とは手を組まない」と強調した。



まとめをするフランク・ミュラー氏

## Report 『山岳』掲載「河口慧海を支えた財界人とその時代」の、その後

藤本慶光

本年8月発行『山岳』第百八年に、拙稿「河口慧海を支えた財界人とその時代」を掲載していただいたところ、90名を超える方からコメントをお寄せいただいた。紙面を借りて心からお礼を申し上げたい。河口慧海には日ごろから関心を寄せられ、私の視点のユニークさを指摘された方も多く、慧海の情熱に感動し、それを支援した財界人とその時代のおおらかな雰囲気懐かしく想われる方もおられた。

資料集めには時間をかけたが、書き下ろしは短い時間に行なった。そのためと言っては言い訳になるが、いくつか不具合があった。

まず「日本郵船」の副社長を長く勤めた加藤正義の勤務先が「日本商船」であると、日本郵船OBの伊藤寿男会員から指摘いただいた。入力ミスであった(97頁下段4行目)。

また「谷井保」について、名前の読み方と生年、没年が不明だったが、ウェブで「慶応義塾出身名流列伝」に谷井の記述を見つけ、生年と読み方「やつい」が判明。また谷井が慶応出身でありながら「加藤谷井を除く」と書いた99頁・上段5行目の記述も未修正で印刷された。名流列伝について、松方峰雄会員も、谷井と弟の矢田績(三井銀行勤務)の記述のコピーをくださった。

彼については、さらに出会いがあった。東京海上OBの磯山隆夫会員からのメールで、終戦時の東京海上社長・谷井一作さんのお孫さんと仕事をしたと判明。早速連絡して下さり、一作さんの父君が谷井保であり、昭和16年没であることが判明した。私も保のひ孫である一彦さんに抜き刷りをお送りした。日本山岳会の人脈の広さに改めて驚き、嬉しく思った。

9月19日に急逝された早川瑠璃子会員からは2度もお葉書で、「今年『山岳』が何か『山岳』のあるべき姿を教えてください。お言葉をお願いします」とのありがたいお言葉をいただいた。ご冥福をお祈りしたい。

People

## テンジン・ノルゲイの息子、ジャムリン来日

神長幹雄

1953年、エベレストに初登頂したテンジン・ノルゲイの息子、ジャムリン・テンジン・ノルゲイが、10月7日、来日した。テンジンが初登頂時に履いていた「パリーブーツ」の初登頂60周年記念のイベントに招かれての訪問だった。日本山岳会海外委員会を中心に、日本山岳協会の有志も交えて小さな、しかし心温まる夕食会が開かれた。久しぶりの来日でもジャムリンは疲れもみせず、終始和やかに歓談を楽しんでいた。その翌朝、短時間だが時間をつくってもらい、宿泊先のホテルで話を聞くことができた。

\* テンジン・ノルゲイといえは、知らない人はいないほど著名なサーダーだ。一方、初登頂から12年後の65年に生まれたジャムリンは、講演などで父親が長期不在になることが多く、子どものころは寂しい思いをしたという。長じて全寮制の私立学校に入るころから、父に倣ってエベレストへの思いが募

ってきた。父のいない寂しさを紛らわすためにも、エベレスト登頂への意思が強くなってきた。ジャムリンが18歳になったとき、その機会がめぐってきたのだ。

しかし、父親の答えはノーだった。「エベレストには私が登っているから、おまえが登る必要はない」。それよりも西洋で高等教育を受けさせて、息子たちには違った道を歩ませたいと思っていた。

「でも私にはわかっていました。いつかきつと、エベレストに登る日がくると思っていました」。アメリカの大学で教育を受けたジャムリンだったが、父の死後、故郷のダーズリンへ帰る決断をする。「オフィスで座りきりの仕事はしたくなかったんです。私はやはり山や自然が大好きでした」

その当時、叔父や親戚のだれもが言ってくれたという。「おまえが登りたければ、あの山に登ればいい」と。

そのチャンスは、意外に早くやってくる。アメリカの登山家デイ



東京の日比谷公園で、ジャムリン

ヴィド・ブリーシャーズが、IM

AX映画『エベレスト』の撮影隊の登攀リーダーにジャムリンを誘ったのだ。もちろん彼は同行を決め、エベレストの山頂を目指す。しかし、その96年5月10日、「悪夢のエベレスト」といわれる大量遭難が起きてしまう。日本人女性第2登

を果たした難波康子をはじめ、6人の死者を出した遭難事故が発生したのだ。C2で登山活動をしてきたジャムリンもすぐレスキュー活動に参加した。そして一段落ついた5月23日、父のあとを追うようにエベレストの頂上に立った。

「私は、自力で登頂した。だが、ずっと、父が私に付き添っていた——私の先に立って、道を拓き、後ろに回って励まし、片脇についてぬかりなく注意を促してくれた。山頂に立って、私は父の魂に触れ、

父の心に触れ、父の運命に触れ、父の夢に触れた気がした」(『エベレスト50年の挑戦』廣済堂出版刊) 登頂から5年で書きあげたというジャムリンは、その書物のなかでいつも父と会話をしている。そして父の声に耳を傾け、ありのままの父を理解しようとする。その姿勢は、敬虔なチベット仏教の信徒そのものだ。

現在、父のあとを継いでテンジン・ノルゲイ・アドベンチャーズという登山やトレッキングの会社を経営している。日本人の顧客はまだ少ないが、日本にはなじみが深く、父の友人、知人もまた多かつたという。

「一番大切なことは、いつでもなにかに挑むというパッション、情熱です」

ジャムリンはそう強調する。東洋と西洋、信仰と合理性、そして山への謙虚さと情熱と——相反するようだが、この言葉が、ジャムリンがエベレストから、そして父から学んだものを示唆しているような気がしてならない。

# Topic 「旅先で出会った古書」後日談

夏原寿一

この春、「旅先で出会った古書」と題した小文を会報『山』に投稿した。古書とは、1938年発行のベンノ・リビッカ著『The Hannes Schneider Ski Technique』(以下本書)。投稿は、松澤節夫会員の勧めによるものである。

拙稿が『山』2013年6月(No.817)号に掲載されると、様々な反響があった。大変ありがたいことである。ここで、そのうちの2つを紹介したい。

## 書店から便りが

本書に出会ったレイクプラシッドの書店に、『山』No.817を送った。添えた手紙には、JACの紹介、『山』がJACの月報であること、本書を図書室に寄贈したこと、紙袋のイラストが好評であること、それと小文の概略などを書き、本書の扉と奥付、イラスト、レシートのコピーを同封した。

ややしばらくして返事が届いた。そこには「いろいろな資料ありがとう。これらの資料が私たちのアーカイブに加えられることを幸せ

に思います。店を始めて40年、それが信じられない気持ちです」などが綴られていた。

30年余り前にたまたま立ち寄った書店とこのようなやりとりをするとは、思ってもみなかったことである。

\*イラストとレシートは記念にと、当時、本書の遊びページに貼っておいたものだ。因みに、レシートには〈25 MAY 1980 \$12.50〉とある。

## 心なごむ演出で

松澤さんからメールをいただきたい。それは「杉山進氏に〈旅先で出会った古書〉のコピーと、『The Hannes Schneider Ski Technique』の序文のスクリーンを送りしたところ、杉山さんから……」と始まっている。

そして、続いている杉山さん談は、〈1989年に催された「シユナイダー渡米50年記念式典」に招かれて出席し、ベンノ・リビッカ氏はじめ、多くのシユナイダーの関係者や弟子に会った。式典やパー



ハネス・シユナイダー



ベンノ・リビッカ

ティは盛大なもので、シユナイダーがニューヨークからニューハンプシャー州ノース・コンウェイのスキー場へ列車で到着する場面が再現された。当時の服装でシユナイダー夫妻役を演じたのはシユナイダーの長男ヘルヴェイ(スキー学校後継者)と娘さんヘルタで、当時のスキー姿の人たちが持ったスキーストックのアーチで2人の入場を歓迎した。私は請われて「シユナイダーの日本での功績」を講演した。また、功績と事績をまとめた記念小冊子『Flight without Wings』が配られた(要旨)という興味深いものである。

それにしても、旅先で偶然出会った古書の著者・リビッカ氏にお会いになったとは驚きであった。

\*杉山さんは、アルパインスキークラブ年報『雪上散歩』(2006年)のインタビューで「ともかく技術、技術と言わずに、自然との対話を楽しんでください」と語っておられる。一方、『The Hannes Schneider Ski Technique』では「皆さんと一緒に光り輝く山々に行きましょう。それが私たちの目標なのです」と結んでいる。相通するものを感じる。

(写真は本書から転載)

# 活動報告

日本山岳会の各委員会、同好会の活動報告です。

## 集委委員会

### 立山〜薬師岳縦走

北アルプス、全山縦走シリーズ第2回に参加した。18時、室堂山荘にて参加者10名で乾杯。夕食後、郷土芸能「越中おはら節・風の盆舞」が披露された。

9月6日6時40分、山荘出発。雄山神社で「安全登山」の御祓いを受けた。快晴のなか室堂を一望、槍ヶ岳が聳え立っていた。一ノ越9時30分、縦走の始まりだ。竜王乗越から獅子岳(2714m)12時20分着。ザラ峠(2348m)には13時20分、ガスのため眺望なし。五色ヶ原では、タテヤマリンドウが迎えてくれた。五色ヶ原山荘14時10分着。

7日6時10分、山荘出発。黒部ダム湖の一部が見える。富山湾の円弧が美しい。越中沢岳(2591m)・二等三角点8時35分着。雷鳥

の親子3羽が道案内だ。北薬師岳が、雲の流れに見え隠れする。スゴ乗越10時55分、ここから霧雨となり、スゴ乗越小屋で雨具着用となる。間山13時25分、雨と風が強くなりメガネの水滴が邪魔をする。北薬師岳15時10分、最悪のコンディションに靴が濡れるが、歩くのみ。薬師岳16時10分、参加者から「寒い」、「歩こう」、リーダーからは「もう少し」の声。小屋がぼおーっと見え出す。

薬師岳山荘に16時50分到着。乾燥室はいっぱい、床はベトベト。山荘主人から、「山岳会は裏の発電機(高温排熱)室を使ってください」との指示、ありがた。さっそく着替えて明日に備えた。夜中の雨音と強風に、寝つけなかった。

8日早朝、雨の中、6時40分出发。薬師平7時10分、沢は濁流だ。ガスの中に太郎平小屋が見え隠れするも、雨は止む気配なし。太郎

平小屋8時5分着。軒下で雨宿りして防寒対策するが、体の冷えもあり、小屋に入って様子を見るとの指示。雨足はさらに強くなる。10時30分、リーダーより「予定変更、今日はこの小屋で停滞・宿泊。明日は……」と指示がある。部屋も決まり、乾燥室や着替えにと大忙し。清登さんから「東京から背負ってきました」と日本酒の差し入れがあり、大歓声。雨は16時ごろまで降り続いた。

9日快晴、無風。休養十分。リーダーより「北ノ俣岳を往復し、折立へ下山し、ジャンボタクシーで新穂高温泉へ」の説明を受け、太郎平小屋6時30分出发。白山が見え



太郎兵衛平にて

## 日本山岳会団体傷害保険 加入のおすすめ

加入対象者(被保険者): 日本山岳会会員の皆様  
 会員の方がご加入の場合、配偶者、お子様、ご両親、  
 ご兄弟、会員ご本人の同居の親族及び同居の使用人  
 の方も同時にご加入いただけます。

**中途加入可能です。まずは、資料請求下さい!**

海外登山の保険、その他損害保険・生命保険全般ご相談も承ります。

資料請求先

東京海上日動火災グループ代理店 株式会社東海日動パートナーズ東東京  
 団体傷害保険資料請求担当: 藤田 Mail:a.fujita@tnp-higashitokyo.co.jp  
**TEL.0120-161-808 FAX.0120-161-809**

る。日本海・富山は雲海。霜を被った木道を進む。高度につれ、薬師岳の左肩に剣岳、有峰ダムの全景、雲ノ平、黒部五郎、笠、槍、遠くに乗鞍、御岳……大パノラマ、すごい！北ノ俣岳(上ノ岳)に8時15分着。しばし見惚れる。リーダーから「来年は、今回予定の三俣蓮華から……」の話聞き、8時50分下山開始。太郎山を経て、折立登山口13時40分着。新穂高温泉16時着、まずは宿の温泉へ。「天国」だった。夕食では飛騨牛、虹鱒の朴葉味噌焼きの料理やイワナ酒を味わいながら、山の話が続いた。

10日8時30分、解散となった。薬師岳は雨のため一部変更になったが、北ノ俣岳の「大パノラマ」が補ってくれた。来年は「三俣蓮華」を歩きたい。(神埜和之)

## アルパインフォトビデオクラブ 第21回写真展「心に映る山々」

今春、フォトビデオクラブの発起人で、発足以来20年間代表を務められた羽田栄治さんが永眠された。

羽田さんが私たちに遺して下さ



写真展風景

った多くの事柄の中に、写真には「撮る楽しみ、見る楽しみ、見ていただく楽しみがある」、「撮った写真は発表する」という言葉がある。この「見ていただく、発表する」が、すなわち写真展である。今年の写真展は、9月19〜25日、四谷のポートレートギャラリーで開催された。出展数は40点、内2点は羽田さんの遺作である。来場者は700名ほどであった。

会場では、山好き、写真好きの輪があちこちにできて山談義、写真談義が賑やかだ。剣岳の写真を見ながら「私たちの登ったところは3003メートルだね」という会話が盛り上がる、こんなことも写真

展の楽しみのひとつだ。

今年の特徴は、デジカメ作品の多さだ。デジカメ作品が登場したのは2007年、その数6点で全作品の15%。その後、漸増するも20〜25%であったが、今年は40%と急増した。とはいえ、フィルム作品が健在であることに変わりはない。雪面の微妙なトーン、平板でない青空の青など、デジカメの性能は向上しているが、フィルム作品の味わいはやはり魅力だ。

写真展の前日、飾り付けの後に会場で行なわれるオープニングパーティーには、一昨年からケーティングを利用している。費用は若干高めだが、テーブルセッティングからゴミの始末までやつてもらえるし、女性会員に何かと面倒をかけることの多い自前のパーティーに比べると、その利点は多い。

作品は例年どおり左記の会場を巡回する。ご来場いただければ幸いです。

- 晩餐会 ↓ 伯耆国山岳美術館 (4・5月)
- ↓ 山小屋サミット・秋葉原 (5月)
- ↓ 酒田市総合文化センター (8月)
- ↓ 長野市・柏与フォトサロン 大門 (9月)

(夏原寿一)

### 図書受入報告 (2013年10月)

編著者	書名	ページ/サイズ	発行元	刊行年	寄贈/購入別
長宗清司	琵琶湖周辺の山を歩く	224p/21cm	サンライズ出版	2013	著者寄贈
金子民雄	聖地チベットの旅: カイラス、マナサロワール紀行	320p/20cm	連合出版	2013	出版社寄贈
山口耀久	「アルプ」の時代	358p/20cm	山と溪谷社	2013	出版社寄贈
高澤光雄	山旅句: エッセー集	225p/19cm	北海道出版企画センター	2013	著者寄贈
笹木義友(編)	新版 松浦武四郎自伝	356p/21cm	北海道出版企画センター	2013	高澤光雄氏寄贈
小泉武栄・他(編)	自然景観の成り立ちを探る/フィールド科学の入り口	238p/21cm	玉川大学出版部	2013	出版社寄贈
ふるさと開発研究所(編)	峰本社復元/富山写真語 万華鏡 No.260	12p/25cm	ふるさと開発研究所	2013	五十嶋一晃氏寄贈
猪熊隆之	山岳気象予報士で恩返し	238P/19cm	三五館	2013	著者寄贈
杉山誠(編)	かやと No.8: 千代田山岳会創立80周年	181P/30cm	宮内庁千代田山岳会	2013	発行者寄贈
JAC東京多摩支部(編)	東京都分境嶺踏査報告書 (2010.06-2012.12)	45P/30cm	JAC東京多摩支部	2013	発行者寄贈
Gor, Ludzie (ed)	Wielka Encyklopedia gor I Alpinizmu Tom VI	853p/25cm	Stapis	2013	J.Kielkowski氏寄贈

## 支部



全国各地の支部から、それぞれの活動状況を、北から南へとレポートします。

## 北海道支部

## 2013年標高年登山

／ニペソツ山2013<sup>メートル</sup>とオプタテシケ山2013<sup>メートル</sup>の支部山行

北海道の中央高地に聳えるニペソツ山とオプタテシケ山の標高は2013<sup>メートル</sup>で、今年の西暦と同じであることから「標高年の山」と呼ばれる。この2座を支部山行とし、さらに、技術研修部門の「沢登り研修」も今期の仕上げとして、兼ねて合同実施した。

この「標高年」という言葉は、1984年に大雪山・黒岳の標高が1984<sup>メートル</sup>で西暦と同じであることから「1984年・1984<sup>メートル</sup>・大雪山・黒岳標高年」として全国にアピールしたのが始まりで、発案者は当支部の植田惇慈副支部長であるのは意外と知られていない。また、深田久弥氏はニペソツ山を滝本幸夫(前支部長)氏の案内で

## だより

登っている。そのとき、「登っていない山を、風聞だけで百名山に入れることは出来ない。そういった意味で、『日本百名山』の改訂版を出すことになろうが、ニペソツ山は文句なしの一級品ですね」と言われたという。しかし、その後、改訂版は成らず、ニペソツ山は幻の百名山となった。

十勝川の原生林を挟んで東西に背を向ける形で聳えるニペソツ山とオプタテシケ山は、それぞれが東壁と西壁のバリエーションを持つアルペン的な山容であり、標高が同じというのも面白い。

8月7日、上士幌町幌加温泉・鹿の谷旅館に、参加者18名(夏道班7名、沢班11名)が集結。翌8日、一晩中降り続いた雨は朝に止んだ。4時、朝焼けのなか車で杉沢登山口へ。そこで沢班が音更川16の沢に入渓するのを見送ってから、5時、夏道班は丸太を渡り、急な隈



2013標高年登頂を達成

笹の中の道を、熊避けの笛を鳴らしながら歩みを進めた。

針葉樹林の中、泥濘と倒木くぐりを繰り返し、ひたすら登りに耐えた。振り返ると、「おっぱい山(西クマネシリ岳・1602<sup>メートル</sup>)はその名のとおり日本一の超美形を示し、元気を与えてくれた。小天狗の岩場7時半着。小休止で腹ごしらえ。灌木を抜けると石狩連峰が見えてくる。次第にガレとハイマツが広がり、前天狗に9時40分到着。曇り空であったが、目の前にそぎ落としたように咆立するニペソツ山の雄姿を見て、「やっぱりいいね」と感動。誰もが「オー」の声。ここ

で1人が登高中止。沢班にメールで「一緒に下山を」と依頼する。前天狗から天狗平、頂上へ続く荒々しいルートを見た参加者の瞳は、「絶対に登ります」と輝いていた。

天狗平10時半、ニペソツ山頂上には12時到着。あいにく、山頂には雲が湧き、眺望はない。JAC旗と一緒に、標高年登頂の感激を胸に写真を撮る。雨の心配もあり早々に下山開始。あと1<sup>キ</sup>標識の近くで雨。雨具を着込み、天狗平まで浸いだ。間もなく雨も上がり、やれやれの思いで前天狗14時着。振り返るとニペソツ山はガスの中。「またおいで」と、山の声が聞こえた気がした。登山口帰着は15時で、沢班と先を下ったYさんに迎えられる「やった……やった……」の歓喜であった。

沢班との合同企画も成功し、標高年2013年/2013<sup>メートル</sup>ニペソツ山登頂も達成できた。18名の力と意志が結集した山行であった。一方、オプタテシケ山は8月17日、大雨・雷注意報発令にもかかわらず、美瑛自然の村・バンガローに西山泰正支部長を含む9名が集合した。翌18日、美瑛富士避難

小屋コース登山口を5時出発。今にも雨が降り出しそうだが行ける所まで行こう、ということでの出発する。「天然庭園」辺りから雨足が強くなり、水無川源頭近くからは暴風雨となる。避難小屋8時40分着。その先の石垣山稜線歩きは困難と判断し、下山。登山口13時帰着。

この後、支部会員の個人山行になるが、9月28日にバリエーションルートのポン水無川を遡行して、快晴のオプタテシケ山に登頂を果たしたことを書き記しておく。

(神楚和之)

## 福岡支部

### 山研利用で上高地と北アルプスへ

日本山岳会の会員であるからには、一度は「山研」に泊まってみたい。また、いつもは北アルプス登山の通過点にしている「上高地」に滞在し、周辺をゆつくりと散策してみたい——この思いを実現すべく、4泊5日の予定で支部の有志9名が、中馬重人支部長を先頭に、猛暑日が17日間続く博多を離れ、上高地の山研に向かった。



河童橋に着いた福岡支部の一行

8月28日、7時5分発の新幹線で博多を出発、乗継を経て中津川で下車。馬籠宿と妻籠宿をそれぞれ1時間ずつ観光。その後、妻籠宿からJR南木曾駅までの中山道自然歩道(3.8キロ、1時間)のハイキングを楽しんだ後、松本に移動。スーパーで4日分の食材を購入し、当日は松本泊まり。

29日、電車で新島々へ。ここからバスに乗り換え、11時には憧れの清涼感満ち溢れる上高地へ到着。梓川に架かる河童橋から明神岳・前穂高岳・奥穂高岳などの峰々に見入る。この日は山研が満員のため小梨平キャビンに宿をとり、上高地帝国ホテルで贅沢な昼食、田

代池を経て大正池までの散策、ウエストン碑訪問などで時を過ごし、夜は飛騨牛の焼肉など野外料理で盛り上がった。

30日、この日から天気が崩れ出す。朝、雨が降ったりやんだりするなか、山研に荷物を預け、梓川右岸沿いを焼岳へと向かう。登山口を右に入り、峠沢の左岸を登って徐々に高度を上げていくと、岩壁帯に付けられた金属製のハシゴにいくつも出会う。登山口から2時間半歩いて最後の一番長いハシゴの下岩場に着いたころ、ついに雨が激しくなる。ハシゴや道が滑りやすくなったため登頂を断念。往路を下り山研へ。単独で西穂高岳登頂を目指していたNさんも、西穂山荘から引き返してきたばかりだった。

念願の山研では、管理人の内野さんから使用規則の詳細を聞く。その後、濡れた着衣・用具の乾燥や入浴を行なった。夜はビールを飲みながら鍋をつつき、ゆつくりと山研ライフを楽しんだ。

31日、明神池から白沢出合を経て徳本峠を往復。期待していた北アルプスの山々の展望は曇天のため望めなかったが、代わりに美し

い高山植物の花々が出迎えてくれた。ピジターセンターに寄って、山研に帰着。なお、Nさんはこの日、焼岳に無事登頂した。

最終日の9月1日、大町山岳博物館に立ち寄り、展示物を見学。特に付属施設の「山岳図書資料館」では、元福岡支部長の故・松本徂夫氏(秩父宮記念山岳賞受賞者、地質学者)が寄贈された図書のコーナーを見学した。当時、図書整理を分担した当事者としては、大変感慨深いものがあつた。

(高木荘輔)



『田中澄江が歩いた北海道の山』  
滝本幸夫・著



2013年6月  
北海道新聞社刊  
北四六判 248頁  
定価 1470円

## 図書紹介

著者の滝本幸夫氏は、本年4月

まで日本山岳会北海道支部長の要職に在り、広い北海道を束ねてこられた方である。道民カレッジの講座で「田中澄江を語る」を公開していたが、今思うと著者にとつて大切に、大切に心に積み重ねてきた「宝物」であつたらう。

明治生まれの田中澄江は、戦前戦後と目まぐるしい社会情勢の中で、一貫して仕事を続け、結婚、子育てなど家事全般をこなしながら、作家としての研鑽も怠らない強い意志と、行動力、気力、機知に富んだ情緒豊かな方だつたことが伺える。特に「長男は病気の後遺症で視力障害を抱えていた。心底苦悩する母としての慈しみが散見され、心打たれた。」

超売れっ子作家だつた田中澄江が「ほっ」としたときが、60歳を超えての「久恋の北海道」への山旅だつたのではないだろうか。その

ころ「高水会」という中高年女性の山の会を立ち上げている。事務局を自宅に置き、「長男の聖夫さんが事務局長」、北海道への山旅も企画されていた。そのことがあつて、田中澄江からの手紙が届くのだが、著者のその誠実な人柄で、山案内という大変な裏方の仕事を、山仲間や友人と連携しながら、さりげなくこなしていく人間性も浮き彫りにされてくる。まさに人としての根源的な優しさの上に成り立つた北海道の山22座だつた。

「久恋の山旅」も、夫・千禾夫の介護で中座していくが、夫を看取り1年後に自身も病み、著者が病院に見舞つたときや告別式(92歳)での情景は、著者の巧みな表現力で、つい涙を誘われた。田中澄江は著者にとつて憧憬の人であつたように思つた。

人のつながりが希薄になりつつある今だからこそ、こうした愛に満ちた優しさや、ぬくもりある絆が貴重なのではないだろうか。一読をお勧めしたい。

(八木橋貞美)

『山の本をつくる』  
中西健夫・著



2013年8月  
ナカニシヤ出版刊  
A5判 288頁  
定価 2940円

昔、京大正門前に小さな本屋があり、三高、京大の著者で賑わつていた。後年のナカニシヤ出版の前身である。本書は、その社長の中西健夫さんの山の本作りの話を書いたものである。

書店のかたわら、京大教養部のテキスト作りなど小規模の出版業をしていたが、1970年、『京都の秘境芦生』という原生林の保護を目的とした本を出版したのを皮切りに、書店から出版業へ舵を切つた。以後、関西地方を中心として登山や自然を扱つた出版を始めた。やがて関西地方のみならず、その対象範囲を岐阜、富山などの山に広げ、そしてミニヤコンカ、ヒドンピークなど、世界の山の登山紀行の翻訳出版をはじめた。大冊『新日本山岳誌』や『カラコルム・ヒンズークシユ登山地図』などは、採算を度外視して出版され、登山

界に大いに貢献した。特に後者は世界の登山界から高く評価されている。

本書の特徴は、本を作る過程で知り合った、多くの学者、登山家など、様々な職種の人との交流にまつわるエピソードである。京都という土地柄もあり、その交流範囲は広く、欧米にも及んでいる。また、随所に見られる著者の登山観もまた一読に値する。

ある人の持つている知識や見識をかぎつけ、面会して執筆を依頼し、はじめていい本が出版できるのであるが、感度のいいアンテナを持ち、知識や人脈がなければできないことである。そういう出版にまつわる多くの話や、各ページにある数多くの写真も興味を惹く。還暦を迎えるところから、スイス・アルプスに電車やバスでの旅行を始め、その旅行記に1章をさいているが、この章だけ特に上質の紙を使って、カラー写真の写りをよくして、なかなか楽しい読み物になっている。

最終章は、京都に住んで77年の自分史を書いているが、東西の出版事情の差、文化の違いなどに触れられ、興味ある。最近の若い人

が山の本を読まなくなったことを憂い、京都の伝統産業ともいえる出版の底上げを考え、優秀な編集者を育て、京都を発信源とする多くの本を出版したいという筆者の熱い思いが伝わってくる。山の本に関心のある人、登山家はもちろん、一般の人にとってもさわやかな読後感を与える好著である。(平井一正)

### 『小田原と北海道 辻村家の物語』

清水敏一・著



2013年3月  
大雪山房刊 119円  
A5判 150円  
頒価

辻村家。この進取の気性に富んだ一族からは伊助、太郎をはじめそれぞれの道で大きな業績を残した人物が多く輩出している。

日本山岳会章創期から登山家として、山岳自然科学の研究者として活躍してきた伊助・太郎についてはいまさらここで語る必要はないだろう。ただ、北海道の岩見沢近郊、幌向原野、馬追原野の開拓

に大きな功績を残した直四郎と、その娘で北海道開拓を題材にした小説を書いたもと子については、これまで知識がなかったことをここで白状しなければならぬ。

いずれにしても、型にはまらないスケールの大きな仕事をした人々である。

日本山書の会会員で北海道岩見沢在住の山岳史研究家、清水敏一氏は辻村家というキーワードを介して直四郎の原野開拓譚やそれを介して小説に書いて世に広めたもと子の業績と、伊助や太郎の業績との共通点を本書であぶり出している。これはこれまでほとんどの人が着目してこなかった視点である。個人として語られることの多かった伊助と太郎だが、改めて辻村家という視点から見ると、その原点に一族特有のバイオニア精神があることに気づかされる。

清水氏は、これまでも長い間目をつけられることのなかった視点から山岳史を研究し、歴史の中にうずもれていた人物や事実を掘り起こしてきた。『大町桂月の大雪山——登山の検証とその同行者たち』しかり、大雪山と小泉秀雄、村田丹下などとの関わりを書いた

数々の著作しかり。

本書も辻村家というあまり気づかれなかった視点からもう一度歴史を眺めてみるという意味で、これらの著書と同じ流れの上にあるといっている。

清水氏が巻末の「余録・雑録」に「挿話や私見を断片的に書き加えたので、時には本筋から離れてまとまりのないものになってしまった感がある。冒頭にも述べたようにもともと曖昧なものだから出来上がりも模瑚たるものになる」と書いているように、内容に人物やそれにまつわるエピソードをたくさん書こうとするあまり、やや雑駁になってしまったきらいはある。しかしその雑駁さもかえって、辻村家という一族の精神を効果的にあぶり出しているように思える。本書では通常捨てられたり、除かれたりしがちな些細なエピソードに読み解くためのヒントが隠れているのである。

いつも興味をそそる清水氏の著書だが、次はどのような視点から山岳史を発掘してくれるのだろうか。

(近藤雅幸)



**平成25年度第6回(10月度)理事会  
議事録**

日時 平成25年10月9日(水)19時～

21時

場所 日本山岳会集會室

【出席者】森会長、節田・黒川・古

野各副会長、高原・吉川・

佐藤各常務理事、大槻・落

合・勝山・川瀬・直江・野

口・山賀・山田各理事

【欠席者】浜崎監事・吉永監事

【オブザーバー】柏編集人

**【審議事項】**

1・名誉会員の推薦について(森)

2名の候補者について推薦があ

ったが、本年度については該当者

なしとした。

(承認)

2・日本山岳協会・東京都山岳連

盟との関係について(森)

9月理事会での協議および評議

員懇談会の意見を踏まえ、現時点

では日本山岳協会への加盟は見送

ることとする。ただし、日本の登

**報告**

山界が抱える問題を検討する連絡協議会(仮称)構想には積極的に参画し、必要に応じて他の山岳団体と共に実行組織を設けることに賛同する。

東京都山岳連盟については、公益法人制度改革等状況が大きく変わったこと、また支部との重複加盟となることも考慮し、退会することとした。

(承認)

3・広島支部への重複図書寄託について(高原)

広島支部の図書室充実に協力し、本部所蔵の重複図書を寄託することとした。

(承認)

4・空調工事業者について(佐藤)

本部事務室等の空調工事に関して複数社から提出のあった見積書等を検討し、適切と思われる業者(三菱電機システムサービス株)を選定した。

(承認)

5・入会希望者について(高原)

12名の入会希望者があった。

(承認)

【協議事項】

当会の安全登山対策・事故対策について(黒川)

遭難対策委員会にて年内に具体案を作成することとし、前提となる基本的方向性について協議した。

(承認)

【報告事項】

1・各PT・WGについて

(1) 110周年記念事業(黒川)  
第一次答申(骨子)を資料に基づき報告があった。

(2) 山の日制定PT(山賀)  
「山の日」制定協議会の最近の動向について報告があった。

(3) 家族登山普及WG(吉川)  
教材開発の進捗状況等について報告があった。

(4) 国土地理院対応WG(佐藤)  
国土地理院から登山道調査への協力要請があり、東海支部が調査を実施した。

(5) マッキンリーWG(吉川)  
マッキンリーにおける気象観測の経緯と今後の予定について報告があった。

2・当会への9月度寄付について(吉川)

2件の寄付金受け入れ報告があった。

3・当会への個人寄付の税制優遇措置について(吉川)

9月27日、内閣府に申請した。またその概要についての説明があった。今後は会員向けに説明資料を作成するとの報告があった。

4・平成25年度秩父宮記念山岳賞の推薦状況について報告があった。(黒川)

5・YOUTH CLUB 全国安全登山実技指導者講習会について(古野)

実施状況については、「山」10月号に掲載する。

6・平成25年度評議員懇談会を9月27日(金)、評議員12名と常務理事会メンバー6名の18名が出席し開催した。(高原)

7・電子国土賞の応募状況について(佐藤)

第2回電子国土賞について、当会からの推薦はなかった。

8・プラハ国際アルピニズム・フェスティバル開催について

11月21日(木)～24日(日)プラハにおいて開催され、中村保名誉会員が講演する。また、その資料内容の報告があった。

9・東京都写真美術館より当会所蔵資料の借用願いがあり許可した。

(高原)

10・日本山岳遺産基金より第4回日本山岳遺産サミットへの名義後援依頼があり、承諾した。(高原)  
 11・(株)TBSビジョンより横有恒氏のアルバータ登山の写真使用願いがあり許可した。(高原)  
 12・日本山岳スポーツ協会等よりの第21回日本山岳耐久レースへの名義後援について(高原)

本年度は、登山マナー、山岳環境保全に配慮すること、また、実施報告書を受領することを条件として名義後援を承認した。来年度以降については、今年度の実施報告を受けて改めて検討することとした。

【今後の予定】

- 1・当会創立記念日10月14日(月)
- 2・新入会員オリエンテーション10月26日(土)13時30分
- 3・晩餐会12月7日(土)
- 4・支部長会議12月7日(土)10時30分
- 5・第4回日本山岳遺産サミット10月16日(水)
- 6・第14回ライチョウ会議 11月3日(日)～5日(火)於：南アルプス市
- 7・屋久島世界自然遺産登録20周年記念シンポジウム in 東京10月20日(日)

ルーム日誌 10月

- 1日 図書委員会 スケッチクラブ
- 2日 常務理事会 集委員会  
YOUTH CLUB
- 3日 自然保護委員会 資料映像委員会
- 4日 国土地理院対応WG 家族登山普及WG 海外委員会
- 7日 総務委員会 高尾の森づくりの会 家族登山普及WG
- 8日 01会 山岳研究所運営委員会 九五会
- 9日 理事会 休山会
- 10日 山の自然学研究会 フォトビデオクラブ 山岳地理クラブ
- 11日 山想倶楽部 スケッチクラブ
- 15日 00会 支部活性化PT スキークラブ
- 16日 自然保護委員会 三水会 青年部 つくも会
- 17日 資料映像委員会 科学委員会
- 18日 緑爽会 山遊会
- 21日 総務委員会 資料映像委員会 家族登山普及WG
- 22日 DM委員会 スキークラブ
- 23日 自然保護委員会 麗山会
- 24日 ルーム検討WG
- 総務委員会 学生部 01会

山遊会

- 25日 緑爽会 秩父宮山岳賞担当
- 28日 フォトビデオクラブ YOUTH CLUB
- 30日 YOUTH CLUB 10周年記念事業実行委員会
- 31日 高尾の森づくりの会 遭難対策委員会 みちのり山の会 10月来室者 566名

会員異動(10月分)  
物故

- 岡村一郎(3853) 13・8
  - 小林智明(4046) 13・10・13
  - 渡辺敏夫(4249) 13・7・6
  - 孫 慶錫(7775) 13・8・31
  - 加藤盛一(9189) 13・6・30
  - 大関 保(9821) 13・10・6
- 退会
- 足立直行(13771) 東海
  - 小串和夫(14625) 東海
  - 坂本高康(14924) 岐阜

■お詫びと訂正

「山」9月(820)号5頁、「平成25・26年度役員紹介」において、山田和人事の氏名読みに間違いがありました。  
 (誤)やまだ・かずと  
 (正)やまだ・かずひと  
 ここに訂正し、お詫びいたします。

## Climbing&amp;Medicine・59

ただ高所にいるだけで  
肥満や糖尿病が改善するかもしれない

大野秀樹

高血圧や糖尿病などの生活習慣病の最大の元凶である肥満は、2500m前後の高所滞在によって改善することが知られてきた。最近、その効果が4週間は持続する、という興味ある報告がなされた (Lippl FJ et al.: Obesity 18 : 675, 2010)。すなわち、2650mに1週間、肥満者が運動もせずに滞在するだけで(飲食は自由摂取)、体重が有意に減少し、下山しても少なくとも4週間持続した、というものである(往復とも乗り物を利用し、登山をしていない)。拡張期血圧が低下し、逆に運動能力は亢進するというポジティブ効果を伴うことも示された。これらの変化に急性高山病が関与していないことは証明できるが、そのメカニズムはまだわかっていない。基礎代謝率の亢進は一部関係していそうである。

加えて、正常体重者も肥満者も、2400mに3日間滞在するだけで耐糖能が改善することが明らかにされている (Lee W-C et al.: High Alt Med Biol 4 : 81, 2003)。つまり、高所にただいるだけで肥満に端を発する(だろう)高血圧や糖尿病を含む生活習慣病が改善することが示唆された。まさに、高所環境は天然薬物である。我が国でも、富士山5合目(吉田口で2305m)、室堂ターミナル(2450m)など交通機関を利用して到達可能な天然薬物候補がいくつかある。幸い、室堂のそばにはみくりが池温泉(2430m)がある。ぜひ、追試を行ないたいものだ。



(絵・大野亜実可)

実際、米国では500m以下の低地に住むヒトは、3000m以上に住むヒトよりも男性で5.1倍、女性で3.9倍肥満者が多く、さらに、高度が200m上がるごとに肥満者の割合が小さくなるという、高度と肥満との間にほぼ直線的な関係があることが報告されている (Voss JD et al.: Int J Obesity, in press)。この事実は、チベット高所やアンデス高所で伝統的な生活を送っているチベット族、インディオにも当てはまるようだ(奥宮清人ら: 登山医学31 : 207, 2011)。

人間は動物であり、身体活動は最も自然なパフォーマンスの1つである。現在、「肥満改善には運動」が合い言葉になっている。登山は高所+運動である。肥満や生活習慣病は、先進国のみならず発展途上国でも大きな社会問題になっている。ともに天然薬物といえる2つの要素を有する登山は、余暇やスポーツの面からばかりではなく、予防医学を含む医療の面からも、もっと注目されるべきであろう。

なお、会報676~740号に掲載された以前の医療コラム1~58話は、医療委員会ホームページ <http://jac.or.jp/post-45.html> でご覧になれます。



マッターホルン(スチックホルン山脈)

TEL 075(254)7902  
FAX 075(254)7902  
<http://web1.ken.jp/shiomidake30>  
47-matsuda/

◆松田敏男スイス・アルプス展  
スイスの現場で描いた絵、アート  
リエで制作した日本画とシルクスク  
クリーンの合計16点を展示。  
会期 11月27日(水)~12月8日(日) 12  
時~17時(月曜休廊)  
場所 姉小路館ギャラリー(中京区  
姉小路東洞院曇華院前町  
京都万華鏡ミュージアム内)



インフォメーション

# 日本山岳会所蔵資料紹介 No.7

[資産番号] 00481 ~ 00500  
 [資料名] 堀田弥一の遺品  
 [部門名] 書簡、ネガフィルム  
 [寄贈者] 立教山友会  
 [受入日] 2011年4月



堀田弥一(1909～2011年)は、1936年、日本人初のヒマラヤ遠征「立教大学ヒマラヤ踏査隊」の隊長としてナンダ・コート(6867m)初登頂を成し遂げた。1954年には、日本山岳会第2次マナスル登山隊長を務めた。当会には、そのマナスル隊遠征に関するものが数多く寄贈されている。今号と次号にわたり、手紙、日記、ネガフィルムなどを紹介する。



高野鷹蔵が堀田に宛てた手紙



谷口現吉からの急を知らせる伝令



横から堀田に宛てた手紙

第2次マナスル隊登山隊長に任命された堀田に、高野鷹蔵は次のような手紙を寄せている。「私は日本山岳会発起人の一人で御座いますが……今年、マナスル遠征のお仕事を御願い申し上げます。……どうか万全のご配慮により無事御遂行を頂きます様、山岳人の老人として神かけて祈る次第で御座います」(昭和29年1月28日)。

期待を背負った登山隊だったが、サマ部落でアクシデントに遭遇、目標の山をマナスルからガネッシュ・ヒマールへと変更を強いられる。それは4月3日、谷口現吉からの「急」の伝令「数百のチベット人集結して我々のサマ入りを阻止せんとす」に始まり、数日間の緊迫した交渉が続けられた。堀田は、会長・横有恒へ報告すべく便を出している。そのとき、2人が交わした走り書きのような手紙から、一旦緩急あればとの切迫した様子が感じとれる。急の連絡は、まず竹節作太の電報、詳細は堀田からの航空便になろう。当時、日本への郵便は18日間ほどを要している。堀田から横へ(4月9日)「マナスル登山を放棄しなければならぬ……」と、その理由を5枚にわたり書いている。横からの返信(5月13日)「4月27日落手、マナスル登山中止はやむをえない……ただし、マナスルの将来に向け、サマに誤解を残して帰らぬよう……毎日新聞社において重役会が開かれ……」などと和紙に鉛筆で書いている。航空使用の薄紙に、時間をかけて書くことができなかったのだろう。

サマでのアクシデントの報告を受けた望月達夫、三田幸夫、成瀬岩雄、AACKなど……多くの岳人が、堀田に手紙を送っている。AACKの川喜田二郎は前年度ガネッシュ谷で調査研究をした経験から、詳細な情報を提供している。望月においては、「……村木・辰沼隊員は新しい領域に入って地名、山名、川名など調べ概念図でもスケッチマップでもいいから作るように」と指示している。

マナスル遠征は国を挙げての大プロジェクトであり、それに応え何としても登頂を成し遂げたいという日本山岳会の強い思いが伝わってくる。

なお、日本山岳会ホームページ→日本山岳会の活動案内→委員会→資料映像委員会→所蔵資料紹介のページへアクセスすると、「会報ページそのもの」を拡大して見ることができます。活用ください。また、公開資料に関する情報・ご意見・ご教示など、次までお寄せください。✉[jaashiryu102@jac.or.jp](mailto:jaashiryu102@jac.or.jp) (資料映像委員会)

## ◆編集後記◆

●日本雪崩ネットワークは、日本山岳会とも縁がある。いくつかのサークル活動に講師として招いたり、また国内の雪崩事故の多くは、事故後なるべく早い時期に調査に入るの、そのような場でも接点のあった会員もいるようだ。

●「雪山で活動する方に雪崩についての正しい知識とマネジメント・スキルを普及させるため、研究者、山岳救助隊、スキーパトロール、山岳ガイドなど、雪崩に専門的に関っている人々と連携し：雪崩を中心に置いた「円卓」をキークンセプトとし、「情報」という視点で活動を行っています」とサイトにある。この円卓というのが、とても重要なキーワードであり、解決の糸口、発展的展開への扉だと考える。(柏澄子)

## 日本山岳会会報 山 822号

2013年(平成25年)11月20日発行  
 発行所 公益社団法人日本山岳会  
 〒102-0081  
 東京都千代田区四番町5-4  
 サンビューハイツ四番町  
 TEL 東京(03)3261-4433  
 FAX 東京(03)3261-4441  
 発行者 日本山岳会会長 森 武昭  
 編集人 柏 澄子  
 Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp  
 印刷 株式会社 双陽社